



Title	否定疑問文における二つの論理関係
Author(s)	中田, 一志
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 16-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

否定疑問文における二つの論理関係

中田 一志

0. はじめに

日本語の否定疑問文は否定も疑問も表さない場合が多いという意味で特徴的である。田野村(1988)は次のような3種類の否定疑問文を認めている。

(1) 田野村(1988)の分類

第一類：発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり，ある事柄を認識するよう相手に求めたりするものである。「ない」を含むとは言え，前に来る表現の内容が否定されているわけではない。

第二類：推定を表現する。この場合も，話者は前の表現の内容を否定してはおらず，寧ろ，それを認める方に傾いている。

第三類：「ない」が否定辞本来の性格を發揮する。

例えば，トマトは果物であり，野菜ではないと主張する人に対して，野菜だと信じている人が「（本当に）トマトは野菜じゃない（ん）ですか」と言うとき，「ない」は否定を表す。したがって，この否定疑問文は三類に分類される。

本稿が対象とするのは，否定も疑問も表さない（一類と二類に相当する）否定疑問文である。形式は「ではないか」「じゃないか」「じゃないですか」「じゃありませんか」など文体や丁寧さに応じて様々な形式があるが，その中でも主に「じゃないか」の現象を観察する。

この形式の統語的な接続については，一類の「じゃないか」は体言と用言のいずれにも接続し，二類のそれは体言相当のみに接続するという指摘がなされている。(田野村 1988, 三宅 1996¹⁾)

- (2) a. なんだ，山田君じゃないか。どうしたんだ。こんな所で。
b. すごいじゃないか。大発見だね。
c. 約束は守ってくれなきや困るじゃないか。
d. ほら，覚えてないかな。同じクラスに加藤って子がいたじゃないか。（グループジャマシイ 1988 の例）
- (3) a. (不審な様子から) どうもあの男犯人じゃないか?
b. (空模様を見て) 雨でも降るんじゃないか? (田野村 1988 の例)

意味的には(2ab)では驚き・発見，(2c)は非難，(2d)は確認を表しているので，(2)はいずれも一類，(3)は推定を表しているので二類に分類される。接続形式も先行研究の指摘通り，一類は体言(2a)と用言(2bcd)のいずれにも接続し，二類は(3a)のように体言に接続するか，(3b)のように用言に接続するときには体言化機能のある「の」（縮約形「ん」）が挿

入される。

このように主だった否定疑問文研究では、「じゃないか」文が表す意味的特徴と接続に関わる統語的特徴の両面から分析されてきた²。本稿では「じゃないか」文を論理構造の面から分析することによって、意味的特徴や統語的特徴、さらに談話構造まで捉えられることを実証的に示すことを目的とする。

1. 論理構造

論理構造「P ならば Q」 ($P \rightarrow Q$) は論理的包含（含意）の関係を示している。例えば、「a がオリンピック日本代表である」という命題 P があれば、「a が日本人である」という命題 Q は常に真である。

(4) オリンピック日本代表ならば日本人だ。

すなわち、(4)が真であるときには図 1 のベン図のような関係を表し、Q が P を包含する

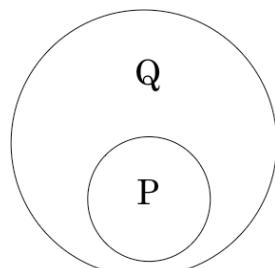


図 1

$(P \in Q)$ 、あるいは P は Q を含意するという論理的関係を持つ。そのとき、日本人であること(Q)はオリンピック日本代表であること(P)の（最低限）必要な条件で、オリンピック日本代表(P)であれば十分に日本人(Q)であることから、Q は P の必要条件、P は Q の十分条件である。

このような論理構造が「じゃないか」文の機能に関わっているのではないかと思われる現象がある。

- (5) 沙絵は勝手だよ。同情されるのがイヤ。かわいそうと思われるぐらいなら、死んじやいたいってよく言ってたけど、でも、人が自分に注目してないと不機嫌になるじゃない」「そんなことないことないよ」（オレンジ）
- (6) 「だいたいな、嫁いで家を出てった女がうちのことに口を出すな」「じゃあ、わたしが口を出さなくとも済むようにちゃんとやってよ。やつてくれないから、わたしが口を出さなきゃならないんじゃない」（フリー）
- (7) 「頭取じきじきの内示ともなれば、サプライズ人事があってもおかしくない」「何だよ。サプライズって。まさか部長に昇格か?」「これまでの半沢の功績を考えればそれもあり得るんじゃないか?」（半沢）

先行研究に基づけば、(5)(6)は非難の感情が込められているから一類、(7)は話し手の推定を表していることから二類に分類されるだろう。統語的にも先行研究の通り、一類相当の(5)(6)では用言と体言相当のいづれかに接続し、(7)では体言相当に接続する。

ここで論理構造を考えてみる。(5)では波線部の内容(Q)が「じゃないか」文の内容(P)を包含している ($P \in Q$)。なぜなら「沙絵が注目されていないと不機嫌になる」ということだけで十分に「沙絵が勝手だ」と言えるからである。したがって「じゃないか」文の命

題は波線部の命題の十分条件ということになる。

それに対して、(6)では「PだからQ」といった推論がとられているが、その論理構造は「PならばQ」と同一であることから、「じゃないか」文(Q)は波線部の命題(P)の必要条件である。(7)の「じゃないか」文はそのまま「PならばQ」の構造で、「じゃないか」文(Q)は波線部の命題(P)の必要条件である。

以上のように、「じゃないか」文が十分条件として働く場合と、必要条件として働く場合がある。興味深いことに、前者は用言にのみ接続し、後者は体言相当にのみ接続し、意味機能と統語的特徴がきれいに対応している³。このことから先行研究の分類を再検討する必要があるように思われる。

2. Pじゃないか

「PならばQ」の論理構造における命題Pに「じゃないか」がついたと考えられる「Pじゃないか」の現象をここでは観察する。Pが命題、Qが発話行為を表すのが基本型である。そして、PはQの十分条件であることから、「Pじゃないか」は話し手が発話行為Qを遂行するのには命題Pが十分であることを聞き手に持ちかけるものである。以下、発話行為のタイプによって順に見ていくことにする⁴。

2.1 指示型

指示型(directives)は、その発話によって聞き手に行為を賦課する発話行為のことであり、依頼・要請、命令・禁止などが代表的である。「Pじゃないか」は、発話行為Qを話し手が遂行するのに命題Pが十分な根拠となることを聞き手に持ちかける。

- (8) 「三田さんは家族が死んじゃったの？」 「申し訳ありませんが、個人情報はお教えできません」 「そんなこといわないで教えてよ。さっきはいろいろいってくれたじゃないい、初めて」 (家政婦)
- (9) 「進学塾なんだけどどう思う？」 「どうって？」 「結構費用がかかるから」 「いいじゃないか。勉強したいなら行かせてやれよ」 (1L)

(8)の波線部は依頼、(9)のそれは命令である。順に「前にいろんなことを教えてくれた{のならば／のだから}、家族のことも教えてください」、「塾代がかかっても構わない{のならば／のだから}、塾に行かせてやれ」といった論理関係がある。すなわち「じゃないか」文は発話行為の十分条件を表しており、機能的には「じゃないか」は発話行為を補強するような働きをしている。

ときに発話行為を表すQが現れない場合があるが、「Pじゃないか」だけでも十分にその効力がある⁵。

- (10) 「君は最悪のサンタだ！」 「だから指ささないでください！ 失礼です！」 「お前だって指してんじゃないか！」 「先生が指したからじゃないですか！」 (リーガル)
- (10)では「お前も指さししている。お前こそ指で人をさすな」といった禁止などが含意さ

れる。図1のように $P \in Q$ であることから、 P で Q が含意できるからである。「んじやないか」にすると、「お前だって指さしている」ことを確認するだけで、直接的には禁止が含意されない。このことは「んじやないか」にはこのような含意関係がないことを示している。

2.2 約束型

約束型(commissives)はその発話によって話し手自身の行為が拘束される発話行為であり、意志や提案が代表的である。また、自身の行為を拘束し、同時に聞き手に行為を賦課するという勧誘もここで観察する。

- (11) 「おすしでも取ろっか、特上の」「えっ？ そんな場合ですか！？」 「ピザの方がよかつた？ ほら。机も広くなったり、汚しちゃいけない資料もない。どーんと広げて食べられるじやない。こんなときこそ、ご飯、ご飯」 (ラッキー)
- (12) 「別に沙絵、啓太君のこと好きじゃないじやない」「そうよ。好きじゃないわよ。そ
うよ」「じゃあ、好きじゃない男の子取り合ってケンカするのやめようよ」 (オレ
ンジ)

(11)の波線部は提案、(12)のそれは勧誘を表している。それぞれ「机の上に広げて食べられる {のならば／のだから}」、「沙絵が啓太のことが好きではない {のならば／のだから}」、「取り合いはやめよう」といった論理関係がある。よって、「じやないか」文は波線部の発話の十分な根拠を表しながら、それを聞き手に持ちかけている。機能的には「じやないか」は話し手の発話行為を補強するように働いている。

次は発話行為を表す Q が現れない例である。(10)と同様に「 P じやないか」だけで十分にその効力がある。

- (13) 「今更編み物工場なんか見学しても時間の無駄ですよ。どうせ編み棒持ったオバチャ
ンがずらっと並んで編んでるのが関の山ですよ」「それならそれでいいじやないか。
ここまで来て工場を見て断るならさすがに向こうも納得するだろ」 (下町)
- (13)では「(編み物工場で工員が並んで作業しているのを見るだけでも構わない。) だか
ら、工場を見学に行こう」といった勧誘を含意している。「んじやないか」に換えると、間接的に勧誘を表すことは可能であるが、「じやないか」の方が直接的である(含意である)ことに注意を払われたい。

2.3 断定型

断定型(assertives)は話し手が声明や陳述を述べる発話行為のことで、主張が代表的である。主張 Q を遂行するためには命題 P が十分な根拠となることを聞き手に持ちかける「じやないか」をここで観察する。

- (14) 「遅かったじやないか。心配したぞ」 (1L)
- (15) 「あのう。昨日ほら、だいぶ飲んで酔っぱらっちゃったじやない」「だね」「何も

覚えてないのよ （最後）

- (16) 「あなたの言葉は信用できません」「だったらどうしろと言うんだね？ さっきから偉そうなことを言ってるが、しょせん君は粉飾を見破れなかつたじゃないか。それは紛れもなく融資課長としての君の責任だろ」（半沢）

波線部は話し手の主張である。順に「遅かった {のならば／のだから} 心配する」，「かなり酔っ払った {のならば／のだから} 何も覚えていない」，「粉飾決算を見破れなかつた {のならば／のだから} 融資課長の責任だ」といった論理関係がある。そして「Pじゃないか」によって話し手は十分な根拠を聞き手に持ちかけている。主張部分には(14)(15)のように強い主張を表す終助詞「ぞ」「よ」や(16)のように確認要求の「だろう」などを伴うことがある。

次は発話行為を表す Q が現れない例である。質問や疑問に対する返答で散見される。

- (17) 「それで何も分からない弟さんに罪をなすりつけたんですか？」「だってさ、あの子なら無罪になるじゃない」（MR）
- (18) 「わたしがちゃんと分別しなかつたから、（ゴミ袋が）戻ってきちゃったの」「えつ。だって分別ちゃんとしてるじゃない」（フリー）

「Pじゃないか」だけでも十分に効力があり、(17)では「私は弟に罪をなすりつけた」という同意の主張、(18)では「ゴミ袋が戻ってくるはずはない」という不同意の主張が含意されている。また、(17)の当然性の解釈や(18)の非難などの感情の解釈は $P \in Q$ という論理関係から生まれてくると考えられる。P は Q を含意するからこそ、Q の当然性が生じる。また、P が Q を含意するなら、非難などの否定的態度を表す Q は伏せておいて、P だけで済ませた方がポライトネスの観点から好ましい。「んじゃないか」にはいずれの解釈もできないことを確認されたい。

次の例は質問や疑問の形をとっているが、主張と同様に考えられる。

- (19) 「つまり…調査の結果から見て、恐らく数ヶ月以内に、大きな地震を伴う、噴火が起ることになるでしょう」「それはそんなに大騒ぎするほどのことなのかね？」大地震や火山の噴火だって、今までだって起きてるじゃないか」「これまでのものとは、被害の規模が違うんです」（鹿男）
- (20) 「刑事さんと何話し込んでんの？」「たわいもないことを…」「ウチはヒマじゃないんだから、適当なところで切り上げないと、手がまわんないじゃないか！」「すいません」（新参者）
- (19)では波線部は「大騒ぎするほどのことではない」、(20)では「刑事となんか話し込むような時間はない」といった話し手の主張を表している。そして、「んじゃないか」文はその十分な根拠を聞き手に持ちかけている。

2.4 非明示的な発話行為

これまで発話行為を表す文が表面化しない例(10, 13, 17, 18)を見てきた。発話行為を表さなくても、その発話に効力があるのは「じゃないか」文が命題 P の部分を受けているから、すなわち「P ジゃないか」であるからである。すなわち $P \in Q$ の論理的関係から、P だけで Q を含意することができるからである。

発話行為 Q が省略されやすい条件はつぎの 2 つにまとめることができそうである。一つは(17)のように Q が前の文脈に表されているときである。もう一つは(10)(13)のように聞き手になんらかの行為を賦課するときや、(18)のように聞き手を非難するとき、すなわち、ポライトネスの観点から P だけでほのめかす方がよいとされる場合である。

すなわち、発話行為 Q は、それを表面化しなくてもよい場合と表面化しない方がよい場合に、非明示的になるのである。非明示的であっても、発話の効力は P が Q を含意するという論理関係によって保証されているからである。

3. Q ジゃないか

「P ならば Q」の論理構造における命題 Q に「じゃないか」がついたと考えられる「Q ジゃないか」の現象をここでは観察する。現象を見ると、P は命題、状況、存在物(entity)を取り得る。また、Q には判断文が現れる。そして、Q は P の必要条件、つまり Q は P の含意($P \in Q$)であることから、「Q ジゃないか」は P が含意する Q を聞き手に持ちかけるものである。以下、P のタイプによって順に見ていくことにする。

3.1 命題

命題とは存在物のあり方を言語で表した形式である。P が命題であれば、必ず推論が関わり、Q は推論結果を表す。推論にともなう言語形式には特徴的なものが多い。接続詞類、条件形式、そしてモダリティ形式や文副詞などである⁶。

まずは接続詞類が現れる例から見てみる。

- (21) 「これで浅野支店長も役員の道が大きく開けたな。入行以来ずっと本部のそれも人事畠を歩んできたエリートだろ？ あの人が取締役になる条件として唯一足りなかつたのが現場経験。だからさ最優良店舗の支店長という肩書きが何としても欲しかったんじゃないかな？」 (半沢)
- (22) 「何をコソコソ電話してるんだ。」「別にコソコソなんかしてないでしょ！」 「お前何であの家のことにそうやって首を突っ込むんだ？」 「そんなの親戚なんだから当たり前にじやない。」 (家政婦)

波線部は命題（およびそれについての話し手の態度を表すモダリティ形式）である。(21)では接続詞「だから」、(22)では接続助詞「から」によって推論過程が明示化され、「Q ジゃないか」は話し手の推論結果を受け、聞き手に持ちかけている。

次は条件表現をともなう例である。

- (23) 「今立て直すために優秀な技術者募集してるらしいぞ。外資なら能力さえあれば、高

い金払ってくれそうだしな。お前なら今より確実にいい給料もらえるんじゃないかな？」
(下町)

- (24) 「それに今お前らは金融庁検査を乗り切らなきやならないんだろ。下手に騒いだら足元すぐわれるんじゃないかな」 (半沢)

波線部は話し手の判断を表す命題である。(23)では「なら」、(24)では「たら」といった条件形式が現れている。なお、(23)の「お前」は名詞句のように見えるが、「外資系企業なら能力がある者には高い賃金が支払われる。そしてお前も能力がある」といった判断を表す命題である。いずれも推論結果は「じゃないか」によって聞き手に持ちかけられている。

次は推論にともない、蓋然性判断や当然性判断のモダリティ形式や推量を表す文副詞が現れる例である。

- (25) 「「遊園地へ行きましょう！」って高校生かよ」「うるさい！」「メールって顔見えないから直接誘った方が確実だよな？」「そりや逆だ。顔が見えないからこそ、うつかりOKしてしまうってこともあるかもしないじゃないか」 (ラッキー)

- (26) 「亜也ちゃんか？」「嚙下障害が出始めてるかもしれない」「そうか」「でも今焦ったところですぐにどうこうなる病気じゃないってことは、お前がいちばんよく分かつてるはずじゃないか」 (1L)

- (27) 「新田はここへ来て何を聞いたんでしょう？」「自分ははじめられた」「きっとあなたもはじめられたんじゃないかな」「心当たりはないか」と言っていた (ラッキー)

- (28) 「もしかすると俺達は大和田の銀行員としての顔しか見ていないかったんじゃないかな？娘さんは本当に彼のことを愛しているのか。もしかするとあなたが彼の権力ほしさに政略結婚をさせようとしてるんじゃないかな」「違う！結婚は向こうから言ってきたことだ」 (半沢)

(25)の「かもしれない」のような蓋然性判断を表すモダリティ形式、(26)の「はず（だ）」のような当然性判断を表す形式、(27)の「きっと」や(28)の「もしかすると」のような推量の文副詞は、いずれも話し手の推論結果にともなって現れるもので、「Qじゃないか」は判断の結果を聞き手に持ちかけている。

ここで接続形式に目を向けると、(25)の「かもしれない」を除けばすべて体言相当に接続していることが分かる。もっともこの「かもしれない」も体言化機能のある「の（ん）」に換え、文副詞「もしかして」を付加すると同値となることから、体言相当の機能を備えていると考えてもよかろう。

3.2 状況

あまり言語化されることがないが、状況がPであるとき、話し手の観察によって状況判断の結果Qを得ることができる。状況判断にともなう言語形式には推定や様態の助動詞や

談話標識が見られる。

- (29) 「古今東西あらゆる子役の悲劇を全て一心に抱え込んだようじやないか。ませたくそ
がきでもあり哀れな操り人形でもあったわけだ。」 (リーガル)
- (30) 「昨日は随分遅くまで粘ったみたいじやないか」 (半沢)
- (31) 「ぎゅつぎゅつ。フフフ。ねえ。」「うん? この状況ってさ何か新婚さんみたいじ
やない?」「えっ? もうやめてよ, ダーリン。」 (最後)
- (32) 「先生。ご無沙汰してます。」「いやー, 元気そうじやないか。君が来るというんで
君に似合いそうな花を買ってみたんだが, どうだろう?」 (リーガル)

(29)では推定の助動詞「よう (だ)」, (30)(31)では類似の機能を持つ「みたい (だ)」, (32)では様態の助動詞「そう (だ)」が現れている。いずれも眼前的状況を話し手が観察した結果を「Q ジやないか」で聞き手に持ちかけている。状況判断をするときに非分析的な形式がともなうことがあり, (31)の「うん?」や(32)の「いやー」などの談話標識はそれに相当する。

「じゃないか」の接続形式は推定の助動詞「よう (だ)」「みたい (だ)」や様態の助動詞「そう (だ)」であり, 語源的に形容動詞であることを考えると体言相当の機能を備えていると考えられる。

伝聞の扱いはやや難しいのだが, 状況とは様々な事態の集合体であり, その要素の中の一つが言語媒体による伝聞であっても構わない。少なくともそれを伝聞として伝えるときには他の状況の要素と考え合わせて, 一時的にせよ, 矛盾がないという状況が成立していると考えられる。

- (33) 「聞いたぞ。この家政婦が子供に暴力をふるったそうじやないか」 (家政婦)
- (34) 「うん。ただ...風の噂で聞いたんだがね, 今やってる研究にだいぶ苦戦してるそうじ
やないか」「人工弁のことですか」 (下町)

伝聞結果は状況判断をするときに重要な手掛かりとなるが, その結果を「Q ジやないか」で聞き手に持ちかけている。また, 伝聞の助動詞「そう (だ)」も語源的に形容動詞であるので, 体言相当の機能を備えていると考える。

3.3 存在物

命題は存在物のあり方を示したもので, 状況は複数の存在物とそのあり方(事態)の集合体である。存在物(entity)はその核となるものである。存在物が存在(P)すれば, 話し手は同定判断したり, 属性判断したり, 価値判断したりするのは通常である。ここでは「Q ジやないか」の形式でこれらの判断結果を聞き手に持ちかける場合を観察する。

まずは話し手の同定判断の例から見ていくことにする。

- (35) 「あれ? クラちゃんじやないか?」 (最後)
- (36) 「これらの変更は大会3日前までにはほかの2校への通知を必要とする」「3日前?

今日じゃないか。」「大変だ。すぐにファクスしてきます。」（鹿男）

(35)の存在物は眼前の人物、(36)では「ルール変更届けの締切日」である。それを同定する判断が「Qじゃないか」で表され、聞き手に持ちかけられている。

次は属性判断の例である。

(37) 「あら？ あれ。お前少しやせたんじゃないか？」（1L）

(38) 「どうですか、人形焼でも」「じゃあいただきます。ん？ 何だこりや！？ ワサビじゃないか、これ」「ご主人にはどうしても味わってもらいたくてね」（新参者）

(37)の存在物は聞き手、(38)では眼前的「人形焼き」である。話し手の属性判断はそれぞれ「痩せた」「ワサビ入り人形焼き」である。属性についての話し手の判断が「Qじゃないか」で表現され、聞き手に持ちかけられている。

次は価値判断の例である。

(39) 「やはり「家族」という言葉は入れたいですよね。課長、じゃあ最終案のキャッチャーはこれで決定ってことで。」「えっ？ ああ、いいんじゃないか。」（家政婦）

(40) 「わあ。うまいもんじゃないか。」（1L）

(41) 「僕は獣医になりたいんで北海道の大学に。」「あ～ 北海道かあ。いいとこじゃないか。」（1L）

(42) 「いや勘違いしてませんか？ 前にも言いましたが、彼ならもしかすると5億を回収するかもしれない。そうなれば本行の利益につながる。大変結構なことじゃないか」（半沢）

(39)の存在物は「キャッチャーコピー」、(40)では「お絵かき」、(41)では「北海道」、(42)では波線部の予測である。これらに関する評価結果が「Qじゃないか」で表され、聞き手に持ちかけられている。

判断の過程で、(37)の「あれ？」、(39)の「あら？」「あれ」、(40)の「ん？」、(41)の「えっ？」「ああ」、(42)の「わあ」や(43)の「あ～」のような談話標識をともなつたり、(38)の「3日前？」や(43)「北海道かあ」のようなオウム返しや聞き返しがともなつたり、(40)の「何だこりや」のような独話が現れたりすることが多い。このことからもQが判断結果であると言える。

また、「じゃないか」の接続形式はいずれも体言相当であることも確認されたい。用言と「じゃないか」の間に体言相当が挿入されている場合、体言相当を取り去ってしまうと、結果の解釈ができなくなることも確認されたい。

4. 談話構造

ここまででは「じゃないか」に論理構造の異なる「Pじゃないか」と「Qじゃないか」が存在することを確認してきた。この論理構造の違いは談話構造にも反映される。 $P \in Q$ の

論理的関係にあるとき、P は Q に包含されていると同時に P は Q を含意する。

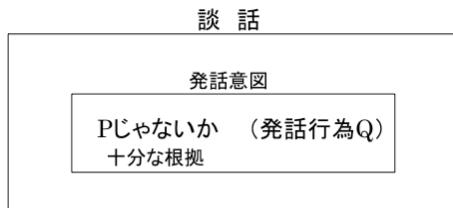


図 2

「Pじゃないか」は発話行為 Q の十分な根拠を聞き手に持ちかける。そのとき、発話行為 Q を表す文と「Pじゃないか」文がともに談話構造に現れる場合と「Pじゃないか」文だけで発話の効力を發揮する場合がある。いずれも発話意図を聞き手に伝達しようというフレームの中に位置づけられる。

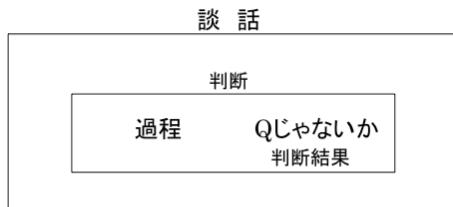


図 3

一方、「Qじゃないか」は命題や状況や存在物 P が含意するもの、つまり推論結果や観察結果や認識結果を聞き手に持ちかける。推論結果が持ちかけられる場合は談話構造に P と Q がともに現れるが、観察結果や認識結果が持ちかけられる場合は P が現れることはほとんどない。その代わりに判断過程にともな

う談話標識やオウム返しや聞き返しなどの会話のストラテジーが見られる。これらは話し手の判断のフレームの中に位置づけられる。図 2 と図 3 は両者の違いを図示したものである⁷。

5. おわりに

本稿は「じゃないか」文に異なる二つの論理構造が存在すること、それによる統語構造と談話構造の違いを実証的に示してきた。ここでそれぞれの接続形式をまとめておく。論理関係によって「じゃないか」を分類すると、表 1 の通り接続形式が用言か体言相当かにはっきりと分けることができる⁸。

表 1

種別	接続
Pじゃないか	用言
Qじゃないか	体言相当、「の(だ)」「わけ(だ)」「はず(だ)」、伝聞「そう(だ)」、 推定「らしい」「みたい(だ)」、様態「よう(だ)」「そう(だ)」 その他、「かもしれない」「にちがいない」「べき(だ)」「(した) ほうがよい」「(すれ)ばいい」「(し)なければならない」「(せ) ざるを得ない」「(し)てもいい」「(し)てはいけない」

最後に、話し手の聞き手への確認要求の強さについて考えてみる。

発話行為を行うのに十分な根拠を表す「Pじゃないか」の場合は、話し手自身が考える根拠を基にして聞き手に持ちかける。発話が効力を發揮するためには、話し手はその根拠に対して聞き手の同意を得る必要がある。そのため、話し手は聞き手に確認要求するのである。したがって、「Pじゃないか」の確認要求の度合いは高い⁹。

一方、「Qじゃないか」は話し手自らの判断結果を聞き手に持ちかけるので、そこでは話し手は聞き手の同意を得る必要はない。したがって、「Qじゃないか」の確認要求の度合いは低い¹⁰。

本稿では他の確認要求を表す形式については触れられなかったが、それについては別稿に委ねたい。

註

¹ 三宅(1996)での分類は田野村(1988)を踏襲し、用言あるいは体言相当との接続の可否という統語的特徴をもとにしているが、三宅氏は「確認要求」という機能を中心に据えて現象を見ているところが異なる。その結果、確認要求を「知識確認の要求」と「命題確認の要求」に分け、さらに確認要求の強弱でこの形式の現象を観察しようとする。この「知識確認」というのは発話行為を行うための十分な条件を聞き手に持ちかける「Pじゃないか」に対応する。それが聞き手に認識されているかどうかの確認だからである。「命題確認」というのは話し手の判断結果を聞き手に持ちかける場合に相当する。なお、田野村、三宅両氏の分類と本稿の原案となる「発話行為の前提・根拠を表す用法」と「結論・結果を表す用法」（本稿ではそれぞれ「Pじゃないか」「Qじゃないか」）の関連性については中田（2017）で詳細に議論しているので、そちらを参照されたい。

² 他に、外国人による研究があり、日本人研究者が見逃しがちなところに着目しているという意味で示唆的である。例えば、張(2004)はデハナイカの広範な意味・用法を観察し、「発見」や「確認要求」といった用法以外に、「判断結果の提示」や「自己所有情報の想起」といった用法の指摘、「発見」「評価の提示」「認識の確認要求」といった用法が出現する統語的環境を記述した。ただ、用言あるいは体言相当との接続の可否については重要な位置づけが与えられるべきものと思われるが、それについての関連性に触れられていない。

³ さらに、思考動詞の補文に現れる「じゃないか」や終助詞「ね」や「な」が接続した「じゃないか」は全て体言相当の形に接続するという言語事実がある。例えば、「予定してたメンバーが急に行けなくなったとかで、突然俺が代打指名されたんだが、最初から決まってたんじやないかと思う」（半沢）など。詳細については中田（2017）を参照されたい。

⁴ 発話行為のタイプに関してはSearle(1979)に基づく。

⁵ 上野(1997)は「じゃないか」文が下降調の音調を伴う場合、話し手は聞き手に注意を促す意図を示しているという指摘をしている。「この次は君の番じゃない」は「ボヤボヤしないで...」、「この次は先生の番じゃないですか」は「早くなさらないと...」というような促しを暗示的に示しているという。本稿の発想と共通するところがある。

⁶ 張(2004)は「ではないか」の一つの用法として「判断結果の提示」というのを立てている。それは「話し手がよく考えたあと、ある結論に到達したことを表す用法」(p. 197)である。その統語的環境として、心理活動や思考活動を表す動詞、前後の文の論理的関係を表す接続詞、条件形式などが挙げられている。本稿の発想と共通するところである。ただ文語的な用例を用いたため、体言化の「の」が表面化しない文が多いように思われる。例えば、「新しい、異質な世界を体験すれば、そこには新しい経験ができるではないか。」は

文語的である。口語的には「んじゃないいか」のように体言化の「の」が入るはずである。よって、本稿のような「じゃないか」と「んじゃないいか」のような対立関係が見られない。

7 中田(2017)は二つの「じゃないか」を談話構造の違いとして指摘している。

8 なぜ「Pじゃないか」は用言に、「Qじゃないか」は体言相當に接続するかという問題に対する確固たる回答は用意できていない。ただ、接続形式は「P→Q」という論理的関係と日常言語の特性に関わっているのではないかと考えている。日常言語の推論においてPは常に入力形式であり、その形式がモダリティ要素などのつかない素の形式だと考えている。一方、Qは推論において出力形式であり、その形式はときにモダリティ要素がつき、ときに名詞概念で捉えられるものだと考えている。

9 三宅(1996)の分類ではI類が本稿の「Pじゃないか」に近いが、そこではI類を「驚きの表示」「知識確認の要求」「弱い確認要求」に分けている。「驚きの表示」については確認要求とは見なせないとしている。本稿では3.3小節で見たように存在物に対する話し手自身の判断結果だと認めている。つまり「Qじゃないか」の用法であり、確認要求の必要性がないものとして扱っている。次に、「知識確認の要求」は「Pじゃないか」から導くことができる。話し手が聞き手にある発話行為を遂行しやすくするために、十分な根拠を持ちかけるわけだが、それが聞き手にとって既知情報である方が望ましい。そこから話し手が提示する根拠を聞き手が知っているかという確認要求に繋がる。最後に「弱い確認要求」は、「よう(だ)」「みたい(だ)」「らしい」「そう(だ)」に接続する場合を想定している。本稿では3.2小節で見た状況判断だと認めている。つまり「Qじゃないか」の用法であり、確認要求の必要性がないものとして扱っている。

10 三宅(1996)の分類ではII類が本稿の「Qじゃないか」に近いが、そこではII類を「推測」と「命題確認の要求」に分けている。「推測」は推量に似たもので、確認要求的表現ではないとしている。また、「命題確認要求」で挙げられている例はいずれも聞き手に関わる話し手の判断結果と認定できる。例えば、「お宅からは、ずいぶん遠いんじやあありませんか」「いや、たいしたことではありません」(p. 115)。これらが確認要求の意味を持つ条件は聞き手に関わる話し手の判断であるという文脈が必要であり、基本的には「Qじゃないか」は確認要求の度合いが低いと言えよう。

【参考文献】

- 上野田鶴子(1997)「気になる最近の表現より2題—「茶髪」と「～じゃないですか」—」『日本語教育論文集—小出詞子退職記念』凡人社, pp. 167-174.
- グループジャマシイ(1988)『日本語文型辞典』くろしお出版, pp. 143-144.
- 陣内正敬(1998)『日本語の現在』アルク
- 田野村忠温(1988)「否定疑問文小考」『国語学』152, pp. 16-30.
- 張興(2004)「「ではないか」の用法について」『世界の日本語教育』14, pp. 193-205.
- 中田一志(2017)「談話における否定疑問文の二つの機能」『日本語・日本文化』44, pp. 1-29.
- 蓮沼昭子(1993)「日本語の談話マーカー「だろう」と「じゃないか」の機能 —共通認識喚起の用法を中心に—」『小出記念日本語教育研究会論文集』1, pp. 39-57.
- 三宅知宏(1996)「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89, pp. 111-122.
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.

Searle, J. (1979) 'Indirect Speech Acts,' *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge University Press. pp. 30-57.

【用例出典】

日本テレビ系ドラマ『家政婦のミタ』2011年10月～12月放送
フジテレビ系ドラマ『1リットルの涙』2005年10月～12月放送
フジテレビ系ドラマ『鹿男あをによし』2008年1月～3月放送
フジテレビ系ドラマ『フリーター、家を買う。』2010年10月～12月放送
フジテレビ系ドラマ『ラッキーセブン』2012年1月～3月放送
フジテレビ系ドラマ『最後から二番目の恋』2012年1月～3月放送
フジテレビ系ドラマ『リーガル・ハイ』2012年4月～6月放送
TBS系ドラマ『下町ロケット』2015年10月～12月放送
TBS系ドラマ『オレンジデイズ』2004年4月～6月放送
TBS系ドラマ『MR. BRAIN』2009年5月～7月放送
TBS系ドラマ『新参者』2010年4月～6月放送
TBS系ドラマ『半沢直樹』2013年7月～9月放送

キーワード：否定疑問文，十分条件，必要条件，談話

要旨

日本語の否定疑問文は否定も疑問も表さない場合が多いという意味では特徴的で、代表的な形式は「じゃないか」である。先行研究では主にこの形式が担う意味や機能と、用言に接続するか体言に接続するかという統語的特徴によって分類されてきた。本稿ではこの形式を論理構造 ($P \rightarrow Q$) の観点から分析する。その結果、二つの異なる論理構造を持つ形式（「Pじゃないか」と「Qじゃないか」）が存在し、論理構造の違いからこれまで指摘してきた意味や機能がどのように生じるかを捉えることが可能となる。さらにこの形式の論理構造は統語構造、延いては談話構造とも深く関連していることを実証的に示す。